役者評判記抄録

特別
チ13
4715

特
413
4716

○野良立役舞台大鏡　　貞享四年版

　　具序文に

「共姑筆蚓鏡野良立肩など〳〵題して、先輩が
野らうの評を書たルちんぷんかんの絶句律詩
に擬つて子細をこねまはしが、猫に小判を見せた
やうなものでよいのやらわるいのやら一ツも合点
がおらぬ云々

とあり。作者は水島四郎兵衛とあれど何人かわか
ず、其中ト唐松歌仙と云ふ小役者評に續けて、近松
門左衛門を誹った評があり、

東谷文庫

55 1391

京より大阪へ出でて見たいものは　名ぐの演義
大坂より京へ出でて見たいものは　歌仙の振出し
おかしたいものは　庚申の出見吉
或人曰く、よいうがましう浮瑞斎本に作者書さへ　嵐の出見吉
褒められぬ事ドやに此次狂言までに作者を書き　南京あやつり
劇へ芝居の看板迄々の札にも作者近松と書記　近松の作者附
すはいかい自慢と見えたり（中略）

○役者校椀等

横本　一冊

元禄十一年評判記
繪ホ一

役者評判記は、元禄十二年八文字屋より刊行された『役者口三味線』を中興として、之より一定の形式が備はりたり。それより以前の評判記は不定時々発行され、又形式も区々なり。従て特サ、本書の如き甚一例をすべし

寅の年（元禄十一年）仲冬中山口上書　以下原文

○此評判記京大阪江戸三ヶ国の役者役何によらず、おにても、せてほしや、うぬさい山程の役者を

れば、不残是まで有之候
三百人余におよびます
に書加へ申の役者古今
年分寅の初狂言まで
評判記を編集仕候
新評の様子、はやく
にとぞんじ候くだをまきやう
不にて、先を以右可被成仆

寅の年古今三人大改替評判の目録

立役上々吉之方

京 竹島幸左衛門　京 山下半左衛門　京 坂田源十郎

京中村七三郎

立役上上吉之方

京大和屋甚兵衛　江戸市川團十郎　江戸宮崎谷吉
江戸中村傳九郎　江戸西村弥平次　江戸森田勘弥
江戸森田小左衛門

立役中之上々吉之方

京澤川十郎兵衛　江戸勝山又五郎　下署

立役中上吉之方

京かめか八九郎左衛門　日　宮崎團九郎　日　筒井半十郎

註　以上この評判記の位付は四級あるのみ（以下略す）

一　けいせい浅日が嶽三番續ほうびの追評

当年の新評　正月廿一日までに、写本書たて、板本ほり加へ二ツ目後そ四ツ目ゆへ　浅日が嶽のうわさ今さらに追評仕外

花岡和田右衛門

此家元殿の誰げいいわゆる浅日が丈の狂言、近頃よい不いたされ不、本評に書た通り、七へんげにおくれを取ぬ上に、又

十三行甘五（あ）屋

けいせい事おくれいりぐ、当年中は何もあ一といふもの、それに気のついたはお仕合一、火鉢の中より、けいせいの姿出る仕かけ、尤ゆふれいおう火の出るは、めづらし一かねども、火鉢の中ようはない図まであたらし一くかぶせ物不、こまかふ気がついてあたら、悪人の死がいに、こも人ほうびの俳句に曰く

けいせいみうら　吉澤あやめ

のかたさまのけいせいるも、前々よりもしれたるながら別ゐはたびはできまし一た、しかし一上々吉にたてらる

ほどの、あやめもわかば、きはまつてよいはづのやうに
評判作者おもひ込をうつ〳〵あくどからず

けいせいおふあう　岩井左陽太

○かゝさまの四年まで、大板座の若衆形、陣
く丑の霜月が京早雲座の女がた　新ざうの太まよ
あのやうな目口かゝさもあろものか、大かた近年
の出来、太夫本四色ばせに、色あつて男ぶり勿体
らく、四年のまるが、待夜の月ろ心地〳〵と奥
ゆかし、まづは此たび大ざんざうへの巫、中村七三
郎ぢの、もみあひ、其後あやめにおかい、恋をしろ
方の恵ちをずと、男をもんではふたつろいきじ

十三行芸尽(お尾)

せんさく、いかさま浅草の神[illegible]いが、のうつ
らせ路あらや、たゞのお尾太でな、あるまいもの
うわさ

小笹もへの巫　中村七三郎

○大しんさまへやまそれ、こふさほどなお上手が初狂
言のやうなおわさ計てまさば何の詮もおく、立
ぎへーて、江戸へお飯りなさるである、それ時
は、京は目だかふ有あた、何そて七三はくわんだ
大かさ京のいきかたも、ちわたるしやと、江戸
衆に来をしげしげまんるう、ずんときのどくにお
もひ、若ひようつと評判あど、ひらんあつて、気の

つくるもやと、本評にいろ〳〵のる、かきたゝ、まづゆたく〳〵の心が通じ、しらぽりとすぢの通つた洩間がなふ丈の清げい、近頃のころゝもなふできたく〳〵でできました

○けいせいかいの大ぢんる、かねてきゝおよびしるあれども、いまだ東風のけいせいかい、大かた見いでも高のしれた事、坂田・大和屋ふぜの、あしもとへもよるまい、あまりすぐれもせぬ事を、書のせふりは、かゝぬがましあるべしと、古評よその事書のせざるはあやまり、見ゆば見るほど、あつぱれの大尽、市一ちやんとてもたれず、くどからぬ、年わかで男がよいゆへ、その

十行廿五字

うつちる、坂田の公平もはだしでにげさふあゝ有、右かのみちもなく、今までない風のくぜつ、暑盤嶋の羽織ひつたくんで、暑ばんに用ひ、芝ゆんのゆかを暮石にあぐらへ、暑のくるによをへて女郎へのあてこと、其外女郎のいひそふふゝ、さきぐりにいふはうめい、其返みうらのあやめにぬかけて、意をくどく良つき目つき、ぢぶりのうつり、死んだ親崖此かたの名折、きくと見るとは、忘がふもの、江戸前の咄を聞く○古評に、武たゞぬるく、ひやうしぬるかあらぬか見たるもあしとは、人のうそがわがうそに成はづかし、ひやうしぬる、太刀打もよく、武をも

目がすゆつて、きつとしたる不あれば、万能丸
といふ名響にふ藥、札錢は世二文、お望あらば、
何ノさ毎、ハ見ねに成ます。
井島幸左衛門の古評

○藤も蔬木も、若竹にあらねども、
にひとし此井島ともとも、ちのいつた刀
放田・蔬木よりはおかく、諸藝今が盛時分
あれば、これを中学ぶたしてもかるべし。○前
評まやつし、名人をかけり、志かれども、ぬれの
やつし、男つきのあ〜きゆへにや、ぎすた見
ゆるおもり中暑 ❺卯の年古評に（十一年前貞享

十行廿八字

四年の評判記）幸の字を高の字に書かへ、げい
の上手ある事、高左衛門には半左衛門にて有
べし、あすれ男つきがよくば、山は下に見るべしと
書り、逃れ共京へもくあかぬかしぬ故、若しは
と遠慮して申ノ年（元禄五年）大鑑に、此事を
除きしが、京にての取さた、大阪より弥々増ちれ
ば、又爰の年此事を書加へると云々

放田放十郎古評

此人狂言を作らる少ば、文盲にはふさそうな、
それゆへにや、からのやまとの引ことおほく、まく
らことばが長すぎて、詞もたんごふりくふ
心ちし、あつこいと云人あれど、ことばのあとを

ひくくなりといよ人も有（前後署）

中村七三郎古評

○丑の年（元禄十年）新評ていはく、未だ年
ゆかねば、今ゟ已の幻とかくやく、お江戸の立役
男つき、丼前のたゞ中、今ゟ辛といふくせも
の、白きことすいしゃうを、白水でさらしても
およびがたく、荒三郎四郎に似たる不
有て、好色者一のつや男、しかもふり生まで
三印四印にいきうつし、ぬかに用てほ、朝鮮
人参よう、きゝがつよければ、江戸の座もと
が、取はまさめゆへ、京ぶたいをふみ抜はぬが
きのどく、いかにしてし男つき、京おきさの役者

十三行甘（あま）

とおもはれて、心にくきも有（中暑）○丑年追評
していはく、此人京へのぼらぬがにくければ、い
つまでし上文字でしまゆふとおもへど、子の年
（元禄九年）小栗の狂言に、萩平伏之巫と、ぬれのう
つりくいんでもつほどぜひと謡し、具根おちぶれて、おに
ゆうが市へ行てものやつし年、さりとは当風のた
ゞ中、いかにしてもこらへられず、丑の年
より上上に改めました。ふちい話しまれど、一と
せものべの忘もんにあつて、政のめとものぬれを見て、
ある町人の女房、名が立て江戸にあるまじ叶はず
今は鎌倉の雪の下

註　以上は、此評判記の大体を知る為に、主ゟ

役者の批評の一端を抄出したるもの。此評判記は繪もなく、又細字にて、普通の評判記と異なるところ多し。

○俳優評書

『古今著聞集』に、春をさくらをもて第一とす。秋は菊を以て第一とす。宇治殿仰せられければ、公任卿梅の候はんには、桜を一にてはいかゞ候べき中略 猫春の曙に、紅梅の艶ある色すてがたしとや されけるは、品定の権輿ともいひつべし

『西水漫遊』『饗庭文庫』に據る

註 この説疑はし、野郎・女郎の評判とも、若し典據を求むるとすれば、『源氏物語』の、雨夜の品定あるべし。

年毎の評書は、かの桐桜の沙汰ひとしく、伎藝の

巧拙を論じて、春秋の花実のあさやかなるが如し。伎藝の評ある、西鶴・国水に肇りて、其磧自笑に至り、其後其笑・瑞笑など、其意を續ぎ〳〵時は、評判記といふもの、京都を本阿弥のやうに思ひ〳〵かど、明和・安永の頃より、浪花の好士二斗庵不物、酒屋隣馬宿、其外奥丸・泊鷗など、評者とありて、今猶年毎に出板あり、といへども、作者は八文字舎自笑を記し、当時にては、大阪を本家とす。

註　宝暦以後八文字屋は大阪に移りて、名ばかり存〳〵あればあり。

評書にあらはす位有の昇進は、明暦・万治の頃より粗見えたり。まして寛文・延宝の物に准へ出版をあらそひ、年々に其数を知らず。然れども位は上上吉を頭とす。其後元禄の末より宝永・正徳・享保の頃に至りて、位を六品に分つ

三ケ津惣藝頭　無類

大上上吉　極上上吉　至極上上吉

上上吉　真上上吉　大至極上上吉

中上吉　功上上吉　至上上吉

外に、畫の白字、ほうび有等、数種に成たり。

評判に、五ケの傳といふあり、其中に寸延尺隔の傳と号〳〵て、一すぢ、延て行人は逢ては行舟の岸は跡へさがるやうに見ゆる段ありて、次弟に出来する

と老こい役者の見合の細評秘事あり。
註　文意晦渋、能く解すべからず、蓋し秘事ある故歟
一年評書の作者江島其磧と八文字舎自笑と確執の事あり。其趣意を正徳四年午正月出版の評書『役者目利講』の序に著す。
即ち『目利講』の口上あり。之を畧す
其磧の傳。古老云、京都京極通誓願寺ハ、浄土宗の本山にて、本尊は春日佛作の作なり。尤も大佛也。此寺の門前に昔餅を賣る家あり。大佛餅とて世にもてはやし、繁昌にて富、巨萬の財主と成る。其後豊太閤、洛東六波羅の南なる

方廣寺大佛を建立せらるゝに、又他家の餅屋、大佛餅とて、新に店を開きて繁昌、今に連綿として世人よく知れり。
扨又、京極通の初めの餅屋は、業を轉じ、誓願寺通柳馬場へ宅を移したるが、子孫自然と奢りに長じ、遊里に足を運び、財を費し、洒々落々たる風流家とありて、『傾城禁短気』の類の書、数百部著して自笑に与ふ。表徳を其磧といひ、通稱を江島屋市郎左衛門と云ふ。この家こそ大佛餅の元祖なり。
また八文字舎自笑は、京都麩屋町の書肆八文字屋八左衛門といふ。姓は安友氏。延享二丑年十

十行廿八字詰

一月十一日歿す。年八十余。あり。

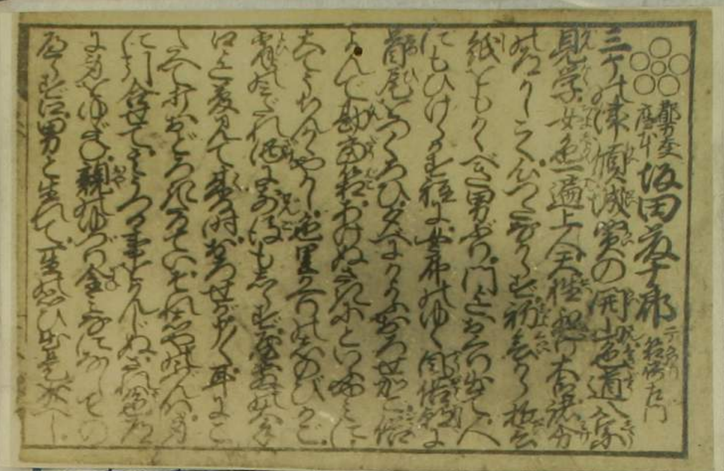
○三国舞台鏡

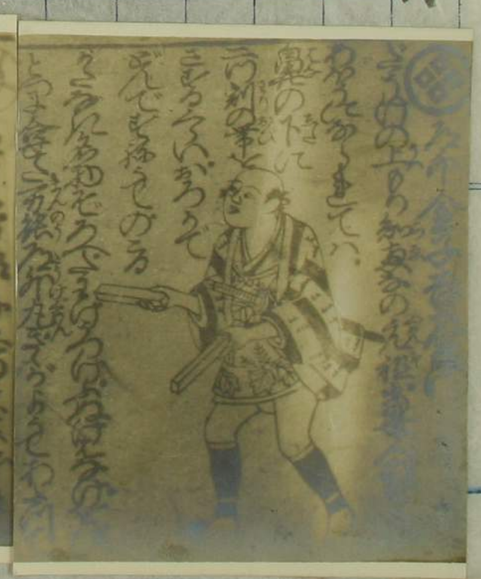
元禄十一年

この評判記に、「狂言古道具訓蒙図彙」と記し、右の如き図彙あり、京二條寺町本覚寺に墓

京之巻

○役者万年暦　元禄十二年三月





○役者口三味線

元禄十二年三月

京　大坂　江戸　三巻の内大坂の巻缺く

八文字屋八左衛門

武蔵野は月のかほは見せ（江戸の巻開口）

あづまにやさ男あり〳〵うあり評判

罷出たるものは、左ばね辺にかくれもない大尽でござる。某つねみどもにいとまごひもいたさいで、ほ中いづかたへやら、参つたとやらす、言語同断不面あやつ

かたへ立こへ、見るにねだらぶとぞんまち、それさて世のそれに、大こ持なまで水くさいものはびさらぬ、とれる大尽がござればゝ、今迄をかけた方へは、みんなふつうたいたゝて、夜ルもひろも其方へ計りついてあるやうにいたし、たまゝ方ぞが方から人をつかはせば、ろすでござるの、はらがいたむのとやうにて、当ぶんそれる方へ計りまするまする。いためそれふと存る、条る程に是でござる、みだもがこゑと知つてござるふは、定めて留守をつかふでござるふ、かけ鳥がかゝつてげそをぶんしてうろ〳〵いたして出つるやうた、田舎大しんのこわつきであん

たいこ吉助　おゝてたあんなものがある。ぞなたそれる方かしらぬまで、あたでござるゝ、大じんいやゝ刃ぢもでおじやる、たいこはあ、大じんにわかのいんぎん、めいわくでおじやる、其をくに、それら魚にめされ、ひらさうお手をあげられい、たいこいかふだんなにはごふくりうと見えました、尤おいそまに条らふとなぞんじたれ共、おづまのおきやくがおかつりあさなさうとて、刃ぢるにし条れて仰かれてござるゆへ、男を生れお江戸を見ませあも残念ふ存ぢやとあつて、にわかに君ひ立てお供をいたした、条るおぶんはるる多にござうたゆへ、ん

おいとまごひにもまゐらなんだ、定めておあいの
景がおりませうが、おさびしうございませうとぞ
んじて、ひきげんなをしたのだたんもの、
ひごろおすきおさるる、ちばねの役者子供の
諸げ物共を、一残らず見てかへつてござらうが、き
いおよふだよりは、ことおびたゞしい志ばね共で
ござる、たゞし何とよふ、きれいな日次すゝとしめて
お江戸のおばねを、残らず見て取つきりうが、た
いこ中〳〵、大じんそれはでかいた、りよはなんでも
きつとしからうとは思ふのうちが、芝居を見たとい
ふことを実いて、はや心がゆつさりとした、今迄の
不面はゆるさふ程に、折くつろいでさあ〳〵は

十行廿五字

なせ〳〵
たゞいこの喜でござる共、一京大坂の芝居とちがひ、役
者子供大ぶんにこさりやばは、つねおはまは
せぬ、先一はいせふといふか、さい山い方共のみたよ
と云、一はいせふといふか、さい山い方共のみたよ
なった、はやう内をそうにやれ、たいこながの道中
に舟川をまり〳〵の無ふんべつに、もらひたあた
一歩共を、つかひ切ツてござれば、汁を取まつかな
さふものがござらぬ 大しん吉助があつまかりかへつ
て、いちばい〳〵までしやうたまらてもとつたよ、よ
い〳〵まづはあ〳〵がきた〳〵たい程に、こりや是に
汁をかいたやれたいこ是は一たり、だんなたは

大阪お月にかしらぬ内よ、いかゝ云はよふせられたこりや二朱ばんでござろの、誠におにどの大じん元は、さすが所からおさ―のひろい御心てござつて、かりをめにくださろ―とあつても、五百目包をくゆんとう紙でぎつはにつゝみだん〳〵の折ひもで四ツがらみにゆゆへ、さのみをんかまらしも仰せられれいで、心よふくたさろ―、〳〵とて一角はづまはらろ―お流が、あの方では皆金一枚、あはゝ判五両ちりすゝまふ下さろ―お方はござりぬ、殊に此二朱を、ゆれらこゝろきのまゝ社では中間ではなと名をなておきまし―たゝ大じん何と二朱判を鴛といふと云ふか、これはきしやな名助やな、たいこ

きれば兼り、いつた所はきやー―やにござれど、にはいかふおかー―うござろ、たー―ん あそこのはおうしや、大こさればニ朱ばんを花にくたさろゆつた、花にちくが思ひ出されてかふしうござろゆつた、花にちくとやわで、うくもすとも、まる、たしん さてく吉助が男共にかべをせうをいたす、ま二朱もらさふを存る、こりやく―ついでにま一つとらさぞ たこまんまと是でうぐひすがつかひにまろまれ、同やくほこのつかひが、友をよひまして、今ち七ねもそんで参つたら、よふござろよ、まづさへずりおほせた、肉をかいにつかはさふも、女どもは衣前かへりく、久々でみやげをとらせてござれは

そのけでござるか、今にあたまがあがりませぬ程に酒あにせばちゃにいたさふ、先かつてから、鴛のからはりはりめじや、あびます棚へえんぜふ、ずんずんつうざほに、かゝらやくたまるせぬへ、がらくく、さあくおろくにござつておきなされまさい、材木河岸の大きん、土に助こいと仰せふて、且那のいかけで、土ふまずにおいにより、着替ためめの気散しあばゝ、旅宿へ心おかずきのまゝすぐに、堀向に心ざし、雨の人々にとひてゆけば、さかひ町ふきや町本松町、中村、市村、森田、山村四の芝居、たんにやうのそ矢ぐら、幸をろあを

いつも定て霜月朔日、愛の顔見世、下り役者、地ばへの子供、思ひくに色と情を一かにかたげた柴つけを、馬を引出す八王子のげんしも芝、有取る網引這、ひいきくの役者評判、いつ気をもめて見るとなく、人のうはさも耳もれ、おのが心ざしの風流ある、さりとは姿に似ぬ、かしらをはぢ、先中村三重のさゝきにぎはひ、闇したまさらはんじやう動三芝居へつゝと入見物たせば、京にかなりて友ものゝはぬものは、たばこの火もくもぬとはとつとむかしきの通るぬ時のるまゝ、今は何かく自由ある見物、編笠まわかたびかぶで、なか

のほりこそば、いつれひいきつよきもなり、ぶたいには、さんぼうに對の鍋をそろへ、役者上下を着し、おばらくきゆうして、くだんの鍋の蓋の花形を取て、先づ舞台へ飛込をまいらせ、それより上座をかり、下こつめ、馬のあとあり迄、つゝしんで此三ずをいたいろう、古実あるよし、其中より半道めきたら男、三度いたゞき、ぜんざくとおつて、一年中ようあたりますやうにとて、どつとゆらひをつくり、是より二三番迄はどまり、上がたとちがひ、座付と云るなく、狂言に出る其面くにて立ものゝ子供、立役(ママ)が手見世一とをりの口上、あつ

はれ、ごんひさはやかに開手でかし、おしまはてると、立役子共上下いたゞきめでたくおしたる役者へ、祝義ふかへるし、花をかざりて是又興あるものにて、伊勢町、舟町のゆかいもの共、一はいぎけんにたかつて、おのがさまぐ〳〵思ひ入、子供にてるのつくほど、千万のほうびをくれるものでござります、たゞんさりとはようおぼへてかつた、其座江戸の芸居を見るやうに思はれて、芳共もおやぢが息子の時、あまりに忠平がよひがろぐそ、さんとかんどうをせられ、一門町中を頼ぶで見れども、誰が一人ゆひてやらふとゝもものもなかつた

、おかったもひ鯉とりやは、五度や六度もかんだう
ではなかったによって、ちゑんちかつきもあゑ
そうをつかったと思へ、さらによってたよろ方
もおふて、悪不友達が江戸へ下ってあろをめあて
に、男のまりを売もつって、そゐをろぎんとろ、
あつまた下りつき、友達のかたに、でい荷のやうん
にて、二とせあまりかゝってあゑが、そのトぶん
みたとは、さだめてしばあのやろろが、ちがふたで
あらふぞふ、さいこさのみいぜんとちがひまったろも
ござりませぬ、まづさかい町には、太まや中村助三
三郎、産や助九郎、則助三郎おやでござり
ます、上方とはちがひ、やぐらたやりもざいも

ござりませず、三かんばん三枚より弁を出さ
ず、一枚に太まや、残り二枚は其時の立も
のと、賞歎致す女方を書きの也、残りの子供
立役は、残らずよそかんばんにござります、おもて
に木たのもの立なるび、こゑゝゝにゆめきまろ
をれはゝゝにぎやかふことでござります、則ち
太まや中村助三郎、きまやうすでゐずと
いへども、家台のひやうばんよく、実事武
道やつろう大かたにこふさるゝ、力業はやや
わざ、そんづはゆうのかるいろう、ゆけて名人で
ござります、たゝんねふきやう市村牛之亟
芝居はざみやや、たいこ先づ牛之亟、寅の年

（元禄八年）なぐ今は亀太と申当年七才にまります子が、跡目をつぎますと並りました、これ則ち牛二匹甥でございます、座ぎは妙念、先づ件之亟母でございます、大一ん こびき助五郎目森田勘弥芝居はござふどや

たいこ勘許とヤスは、坂東又九郎が孫でございます、勘弥は三ケ津にあらぶものもなの所作仕でございます、男小ひやうにござりまするゆへ、又ばへはござらぬ共、げいでおして参る、武道ことはかいもくでござります、ゑぎつる丑の二月より、岩屋不動の時、中尊不動明王に坂東又太郎せいたかに兵五郎、こんがらには勘弥でござり

ました、三人一所のひやうばん、さあく の所作の中にては、べつして勘弥がすぐれたとほめましてござります

たいこん 梅山村長太まさいこ 太まさ今山村与太まは十二三にまりますするが手役に出まして、所作をよういたいけに仕ら、座ぎは山村五郎左衛門、やぐらの紋は宝とつふ文字でござります、お地の子供下り役者、すべて氏道のげいしゃ共、さかい町へ出るは、さかい町ふきや町支町に居住せらるゝ、又こびき町の右ばおへ出ら宿をさだめ、所々にお寄なれておはせめ故に、微細

に所をいひあてはすにおよばず、ついては当
共がそはに風流な男がござりて、惣役者子
供の評判をせ聞せた程た、あら〳〵お咄を
やまうよ、大じん分程芳哉がしつた役者も
ある程に、此方からも尋ねうで、先づ立役と
上々文字は今誰じや、其風俗な人の評判
を、依状あつたはあせ〳〵

上上 ◎ 立役者之部
市川團十郎

大ぢん（いはく）此人一とせ京村山座へのぼらぬ時、尤
一たん京の見あくるあたやうにはあつたれ共、弟一
あらいますがるものゝ、是京にくはぬふうこゝ、ぬれ

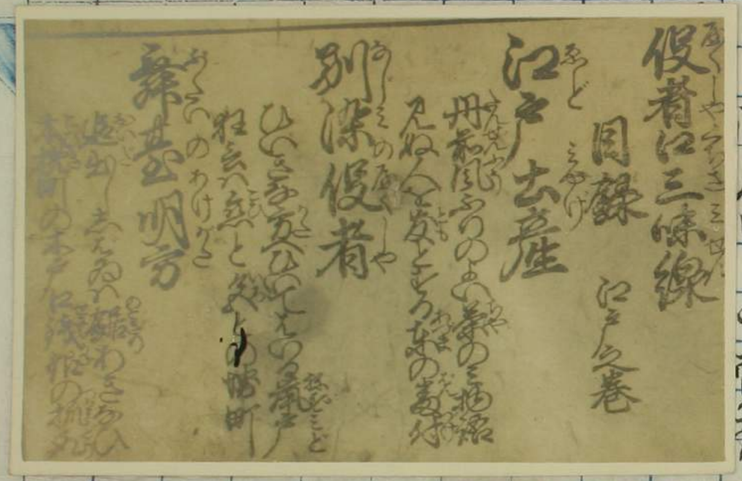
十三行芸尽（あづま屋）

ますがぶえてそうた、其上ものいはうに、いきさ
つぎせあしく、なかつをうれ見えて元の毒、藝
はこありごころあほし、お江戸にてはどふあるぞ
大こ吉助（へんたう）りうぐあいあから、井の内のかはづ、大
かいを知らぬそはだんなの事でござります、
外をござんせぬ故にや、昔日市村座そ
名古屋山三郎、遊女論の狂言よ、不破の
伴左衛門とふうかぶ時、江戸中こぞつてほめ
ました、則ちそれより三座に名をあらはし、
江戸立役の開山とようなれぬあ事むべあるか
ふ、諸藝を何をしらぬそも、見おとそ、た事
なく、万能丸と稱美いたします、弟一実事、武

道のつめあひあらうちうんがうの之、世間に金平、五郎時宗などのあらおしやをまるまる、みおこの人をまねぶこと、すべてあらおしやうの祖師といふより、子の夏（元禄九年）山村座にて鳴神上人にあつて大入をとり、寅の年（元禄十一年）さ〳〵きの家来あらおかぬたの門とあらて、江戸中の評判をよろこばしめ給ふ、而ゆゑもぶろうもぬすこそ、今市村おはする中村七三郎と和におはして、七三郎はなごや山三、此人は石橋の伴左衛門とあらそひけれの男のおんに有と、上方までも評判ござつた、其一ひいきつよく、いよ〳〵諸

けりをはりまろ〳〵と見えて、一日〳〵で見ますばかりでござる、江戸中一の賞翫同にル、おでまもこし

かた〳〵



○芝居一代男
元禄十三年

○三国舞台鏡
元禄十年

○名古屋山三
未詳この評判記が年号の無きもの

○役者談合衛
日 十三年

○舞扇子
日 十七
石川いつれも
多 と号じ外

○役者二挺
元禄十五

梅清は石信
二番続きの絵尽の如

○役者友吟味　　中形秋幸花色表紙　三冊

宝永四年三月　　八文字屋八左衛門

上上吉　　村山平右衛門

上吉　　桜山庄左衛門

（大坂巻）

巻頭　　嵐三右衛門　座数十一本

去々年の役者三世相にくはしければ改めて云も
くだ、、聖人教には八才にして小学に入、母子
八才の冬おもりか親の名跡をうけ、難波の春

と栄え、五や二ヨせの春秋をくり、三年月
め亥の年の歌みせ業月をくり、高やくらの
揚幕 三代つぐく角に小の字、親よりつた
ゆり歌みせの功と正月より切とるは、甘秋古伝
を此家の 義と号、山榊は小つぶなれども、
からし、けし人形の分をして、一そうふつて出らる
ると、ゟら嵐様と諸見物とよみをつくる、何れ
物あら役者節でござりまとめか

○難波入口舩

亥子五年 三冊

宝永四年 評判

十三行廿五字あり

○役者色将基

宝永五年

此評判は子ノ正月より三ヶ津役者不残評判致
板行仕候尤前々ようにいつぐも毎年同様に西向より出るを
いつとしてめつらしからず其上推量書又は
顕員勝、名々の詰同上中下共に相違候を
て此度三ヶ津の役者又つぐ而細ヶ敷
大評判役者色将基大全綱目と名付ケ、全
部古冊に仕り板行いたし候間御望の衆に
能々吟味に成りとめ可申候

宝永五年子ノ正月吉日

柏屋勘右衛門

○野傾友三味線（一名色競馬）　横本　五冊

西澤与右作

宝永五年閏正月吉日

傾城・野郎の内幕をあばいたもの。好色なにあらふれた話のみであるが、談話の内には参考に資すべきものあり、其二三を抜抄すべし。

嵐喜世三郎と菱川の繪

嵐喜世三郎を、菱川を頼んで生うつし、不断床にかけ云々

西鶴の狂句　「一ト世鉦木平左衛門座せ」に、同平八大あたりにて　良見せや判官員鉦木が

た と狂句の作者例の西鶴、難波の臭は伊勢の白粉
と評判五冊、上上吉弥は白粉所云々

世はーなき物は 「次の間の時計
なぎぶし、なげぶしの年 「たつふりと、面白い事を
うたふて聞せ玉へと、いづれも訴訟負よあつて望
めば、こゝを通る熊野道者、手にもつたも椰の
葉、笠にさいたも椰の葉、とよ歌を、今の目から
見れば、鼠のかおるやうに、琴うかきちらせば、
さてもこいくすぐもある象を、一時に指はたい三本に
て、舌ふらゝ玉ふは名誉ありと、声をそろへて誉め立
ける・これ近代なげぶしといやは、なぎぶしのかはり
にて、籠の鳥かやうらめしや、と好色大鑑の

十行廿八字詰

作者が、つくりかへたる謡ニの根元なり。
いろゝの小見世物
「論談一定しがたきおに、物
ふれたる店屋、仲田が大からくりに、間々に子供の仕形
舞を入、道行には浄るり、頼光山入、酒呑童子も、朝
比奈もあれば、両方お兼たり、一座四ツて、九月
節句ようはづまりじや〳〵、これもつれて、いい
ろゝの小見世物あり、良は三十二相の女、そりは十
七、さればいかまるるの葉乃や、三女呂の葉へ
、見れば接生にある
竹林の七賢も金 「唐土仲丼の七賢も、ほしがる物
は酒、其酒は銭に極るぞかし」
大阪色町の変遷
「今の新町・阿波座・越後町

吉原町の四筋、四町つづけば十六町の色里、始は八軒屋・谷町にありしを、慶長三年、堺筋に移され、道頓堀にかはり、又市町となれり。元和年中に此井町にあつまり、兼康年中に天保三軒を並べ、延宝三ツの色町も、おちぶれ、日月のひかりかゞやきまして、床間の雲はれ、夜見世といふもはづかしさつぱりと死んだら、終名の為の心中

司

草子にありともあつて、名を、残さゞるものを、

心中きげんさめて

道

浅井花屋伊兵衛の菊

北を望めば筑波山（中略）

飯りがけに浅井に立

十行甚だお粗

道灌山に杖を引て、

うち、花屋の伊兵衛より、花壇百菊のさかり、山路の露にぬれ出たり。

・大般若・大白・手まり・陽妃・これは猩々・金目貢・紅しぼり・くちあか・南陽県の水上に浮ぶが如し。

○役者誓文書留

寛永十二年亥二月

一、諸芸者の位付、級を設け、八文字屋八左衛門
　　上座　風姿花伝第一
　　功者　当座
一、又開口の下に、
　　所作を中立ます
　　恵の中山安右衛門の読をもつて

三巻

○役者誓古三味線

寛永十年子閏正月

三巻

○役者胎内樓

寛永六年三月

三巻

○役者誓状違

寛永七年三月

三巻

右は狩野筆 春月 十五年 卯 十月

芝居 法印

色助 敬

二代山 七三郎 名代 名屋 や 初太夫

りん 姉 今 歩 月利 講の評判

座なく

名代 やとい 梅こ 亜 幸 中村 翁 助

月四 郎 顔 又 亜 仕 りんこ 月利 講

右を 新 幸 もの 也 ふ

やうにて 仕 りたる おはその間 用 お 玉

うず

西性男のてりくもる月の巻

十行廿五字詰

一条ら出し評判は、等の役味つぎん
み仕り、調合に念を入れ、少しもそまつに
不仕ゆへ、毎年廿日はかりおをなうやん
左様にいん附いもちあ一つ下れ、当年は
二り歓見せ延引ゆへ、右のみ汁酒を毎年一用ゆ

京都本家
おや町通せんぐもん下ル町　八文字屋八左衛門

正徳四年午ノ二月吉日

京之巻

祇園牛頭天王御託宣

五后繁昌のためとあつて、氏子中より陽の花
をはづまして、天王にも海老と思召、吉日の
渲染より氏子を千金まもかへぬとあら。当社は
八十五匁お場の二十金にも替じと思召、さながら
芝居の銀午の凍りついてまもるべし、いづれも信を
取て右ばのひいきをふしぬへ、毎年役者評
判をおつげて、八文字やが板行する年、芝
居のばけみにもなる年と、いか程か神慮ふ
こばしきふに、当年午の年大評判とさうし
毛を吹いて疵を求ろ目利講、是吉左具を
買あつめる、ゆけしを評判こ、さうによつて
今くんじもの中までひろうにたせうの和歌こ

紙ろに年来八文字屋許利と仲悪する事、すでに家の景図ゑばば、当年許利を色景図となが〳〵べし、茲に目利講といへる許利本こ、八文字の作を雑言〳〵ろう樽ぐ、いて〳〵ろんじ物てそうすべし、先目利講の口上中みは白字上なぐ〳〵、中位をいたして彼者口三味線を歸歸して江島屋新作者がつくりたりと書たり、そのロ三時線よば、り、八ツ乳のゆての腹のぬいうんぞや、白字の位は三時線より八寸指、役者友吟味より弁ーで、是八文字が他の作を借さら誰様ろ神は正直の頭にやどれど、あたまかぢなは大きにぞす、いかた芸居なのめん〳〵、もらい札を守りにおさめ、信を取て役者のりいさあ水ロ右年ハ三ケ津橋ふて四芝居で合せて十二月の数一年中はやり通〳〵大入を取べし、鬼角他ホ〳〵八文字をあどろまいり神外こ〳〵▲八文字叔いづも様、神は見通〳〵様でござりませめか、私も一通りまいふ▲あるのお流なてるくどう長さしきますは、おもしろふござらぬ、善悪は見る方よむ方が眸で、いはぬはいたまさるやや、せり あるもので作に味吟し、本に念を入れて、皆のお方のひいきをうくろやうたのまされ▲八文字ロ芸見にまかせ何事もやしませめ、氏神の加恩はふ

かいるじく▲お客のお気に成よあらそはれぬ事で
ござる、アヽのどかおひよりじやよ、どこぞで一ぱ
いのみかけふ、何はあつても銭はあり、よいやさ
く

▲若女形之部

上上吉　山本かもん

（前略）「評判のせめかき」に座中こまぎれものが
有ゆへ、せんぎ致を、そてなあみ笠さらぬか、同
のあまの内に行ぬと、目ふわ尺するぞ、かもんの
ゆかぬ男」と共をうさんなとは何をいふ、芝居
評判の大当、当年も月利講とや

十三行芝居

評判千へ参つて、あつはれやつた男、きの世
んからの評判をとくと一そのみこまぬ、失敬み
せこかもんなものが姫へおくし鉄でとうちく
の警は、外の者大阪嵐座で死ぬて津川半たま
取いたよふ、京市良次座で仏島瀧三蔵とせう
ルたが、瀧三蔵は大有功者なた、仏島右はなど
いはぬぞ「評判良者芝居人間」あゝ凡まじや、長
方がひいきまち月利講なた、不実かおほい、先
京の風ぼーや座でお誰ぞふその篠塚殿、
岩井半四郎取、先の内役所もなきる、京若女
の差ムよ牛嶋瀧三なをなをし、中村座でお顔み
まてまんでくらの評判、中村座の新久せは

○役者返魂香

正徳五年正月吉日　江島屋市郎右衛門板

此反魂香の作者は、去春に目利講よ印ゝ通り。八文字屋八右衛門方へ、去ん卯年口三味線とゝ評判を綴りおてより七年々八文字屋方へ仕差まゐらせ候ノ年まで十五年の間仕候作者名ゝそれ〴〵共八文字屋方勝ち成仕形在之候ニ付、去年の春よりは江島屋方へ仕差しかゆへ八文字屋方には、去年うり出し候人の新作者をゝとゝ、右年来の風りを仕、古間の人様へかづけ申候ハ殊に去冬狂言本

去二月より始まりしが、升島濱三郎がごこに出るゝ、おふく右衛門はぬ人を、女形の頭次ゝは今も云が、まだつくゞしたらぬ、さあ云分があゝば云て見よ」がんゆかぬ男」何ゝ云ぶん有ばお手前成ろか「無産中ノ流」あゝ是ゞがまりおへ、こなたた目利講ひいきならば此産へはいき用、ひらに飯らゞやれ「がてんの行やぬ男」いひ分があれ共ねってとらすぞありがたゝとおもへ「がてんぞん任所」あのやうなゆこせひいなゞたがよい、拙僧がひみつのお札ゞ有、門ばゞらへはうまませふ、是をたらと、あのやうな悪評ゞけさゞをなさぬ、はつゞゝ（下畧）

の口書にめったあら評判出ッとは、いかゞや今
まねまやー毎年ッ仕例たる作者の評判八、此
巫魂そもーにて中にその座の間外題の吟時至ル
ッ求めてさらべくッ尤八文字屋方今出ッ評
判本其外風俗本共にまくの作者とはかなり
妻子人の新者にて自今は江島屋をも
本やの方がッあるみの作者ま約れ本ッそれ
珍敷しから共ッよくべ通ッ覧ッ千
ッ約束ッ者在之ら故ッ防ーそれ

㊥役者懐妊帯

正徳五年正月吉日　三冊

八文字屋八左衛門板

十行廿五字詰

掃繪祐信風ー例の江島屋より出たる評判記の
悪口を書きたるものあり
例年の評判本ッ印版
名遊てあらをはぬ凡例
一、会を入レゆばなるさらあ　縁組と役者評判
一、まあて悪あめめしもの　盃の遣りと役者評判
競馬、鍋流馬、おはあ船にひとーく他とあめそ
て早きを賞翫あり世は評判本ッ霜月の中
比まは出しッ月よりかけッ半けれど、すでに当年
大阪の芝居京の芝居そろひあね　ほく今日まま
かりなりッ
一京よし坂あやめ紋ホ　きりのとろヲかやうにい

いたし候
一大坂は五芝居なり 他ゟ出居ハ三芝居計り
評入レ共八重桐座と崑三右衛門座不足
一京都は常盛座いまだ顔見世仕ず しかれ共
名代座ゟお極る上は 作者揃ハ申迄もあるまた
役者立をいたし候
一大坂の座ゟ篠塚庄松当顔みせ ゟ宗八と名
を替しを他ゟの評判よろしく宗八といふ名みえた
是等の暑をはかんがへ下さるべく 作者そろえ
ハ去年とても又当年ゟ前ゟおとなげなく
やといづれも様のお手まへをなさるべく候
已上

十二行廿五字

各々様

作者八文字自笑

㊀役者我身堂

正徳六年正月二日

三冊

江島屋市郎右衛門板
鶴屋喜右衛門板
正本屋九兵衛板

（前書）
此間口のうちに左の如き文句あり
ある時同じ作の芝居の評判をしけるに、ちかき頃の藝をかぶきのげいのようにあり、尺布を

しらぬ素人がまんざらの素人の筆をたのみ、いかの橋をゆたるが如く、讃まで書本をほめ、稱ゆるすべきおを誂へ、いよ〳〵の名をきゝまがへ、其人にあらぬ人をおしてをれになりてのひやうばん、其趣を好んで善悪をしらひやかし、せんと思ふ後者評判の講頭、かようのうるひやうばんのさうにあら筆のおほきをおげかしく思ひて粋ある芸妓好共をまゆきおをめつさりとみのあらたまる春の日のなぐさとふしてめうかある評判をくほたてをなし一升けん人のんでをかたなりけり

千秋萬歳樂

十三年正月 屋

○役者金米糖 化

享保四年正月

序

女は已を悦ぶ者よ容、おもはぬものゝおまには（かたち）たのんでもなるぬものなり、けいせいかいのくぜつし、我おとふとのとなるではせぬものぞかし。爰以て見た時はきのふまで識りあひたし、互にてろよかるから、かなはぬ筆先で貰ますのといさかいしゝ、今日おしひなましをみれば、夕方がロ舌まひとし、去春よりいひあつたさがくしいをし、ゆるさりと金化粧して

いつまでもかはらぬかなの相枚、すりあげた額に角の立ぬやうに、まん丸びたいの玄墨の、濃中とたらたき、下地ぐきゆめ心の糸の、引あぶた口三味線の柏子にのつて、三津の役者評判を弘め初てより、毎年定て所作事とあつて、古のよさ女のおもてはやしにあづかるは元さきをおもへば、そちこちも、本望のいたり陪今年の方を改めて評判に今をいりや、五六年し識りつけた口ゆへか、ちと仕度の評判もいたいが、一不審お有いうかハテ芝りや春永に役者五皇お傳の、二のかはりの評判で聞そいたそふ、かしこいたそふ、先今はたまりぬる春のめでたき

中あきりのふはりめあれば、たがひに機嫌よくまうちりと笑ふて引幕

手時めでたいとしの
うれしい春

作者　八文字自笑
江島其磧

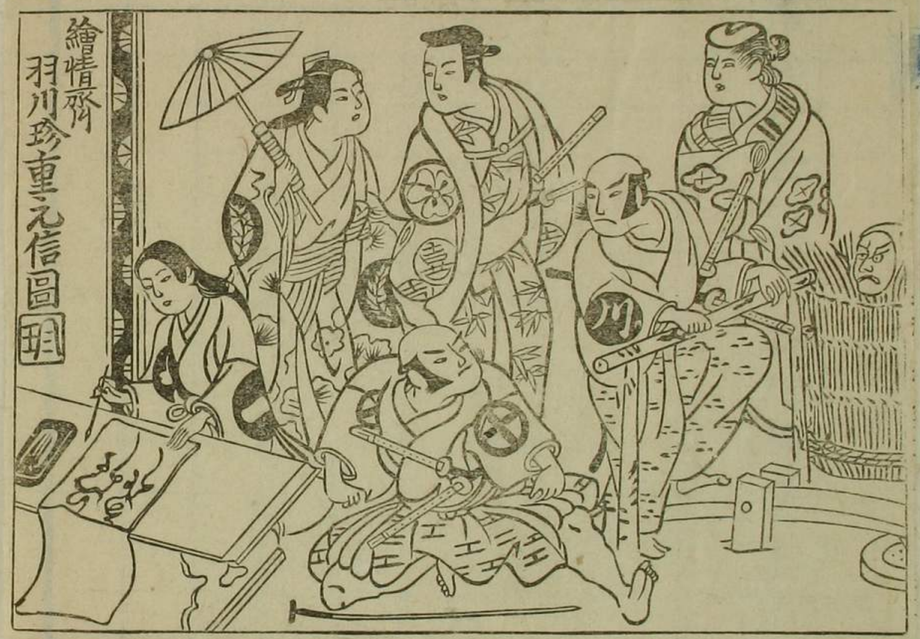
享保四年亥ノ正月吉日

八文字屋八左衛門　梱
江嶋屋　市郎左衛門　校

享保七年

三冊

二条通寺町西へ入町
鶴屋　喜右衛門



正本屋九兵衛板

此圖江戸巻
だけにあり
他ハ従来の
通りなり
されば江戸
巻之初刷
珍重加筆
きうなり

十三行廿五字(おの)

○浪花華梅（無題）　三冊

作者　瑞笑

○役者和年梅（無題）　三冊

作者　作者并直　三笑

○浪花華梅（無題）　三冊

作者　瑞笑

○浪花華梅（無題）　三冊

作者　作者并直　三笑

○浪花華梅（無題）　三冊

作者　瑞笑

○浪花華梅（無題）　三冊

作者　瑞笑

○浪花華梅（無題）　三冊

作者　瑞

の訳をもうしうる人は、誰かは出ずべき。
しかるに、彼の、徒をもって彼の君を滅ぼしたのと、彼をもって、彼の君を守ったのと、その事をもて比べ論ずるときは、彼の君の為に、彼の臣の尽したる忠義の程、いかばかりぞや。
かくて、世を去りたるのみならず、その子孫までも、ことごとく絶えはてたるは、いかなる天の報いぞや。
まことしからぬ事ながら、世俗の諺に、「善人の末の絶ゆるためしなし」とかや、いうなるものを、彼の君の子孫は、上下ともに、今なおあきらかに、世に存在せり。
これ、天の報いの、いちじるしきにあらずや。
しかるに、世の人、ややもすれば、天道の是非なきを怨みて、悪人の栄えて、善人の滅びたるを、天道の是非なきを論ずるものあり。
これ、天道の是非を知らざるのみならず、上にあらわれたる、小さき事のみを見て、大いなる天の御心を知らざるものなり。
彼の君の子孫は、上下ともに、今なおあきらかに、世に存在せり。
これ、天の報いの、いちじるしきにあらずや。
しかるに、世の人、ややもすれば、天道の是非なきを怨みて、悪人の栄えて、善人の滅びたるを、天道の是非なきを論ずるものあり。
これ、天道の是非を知らざるのみならず、上にあらわれたる、小さき事のみを見て、大いなる天の御心を知らざるものなり。

とかくのごとくし、今は人名をそれのごとくに改めしまで、別して、よくわかるようにはおのおの口より言いがたきゆえ、義の上にて、かくのごとくしるしぬ。
かくのごとくしるしぬれば、大坂の事実をもって、江戸の人に告ぐるがごとくなれども、決してしからず。
大坂の人

かけて天王はで、あたり右側ねやし、世たあ歌
語のうちにてのべそるものうち名花でこし、春なあたりとくね
ありとを今世てつ名花を、大会に集をあたり〳〵かくり考
評をつ名あり〳〵かくり方れるや、世俗にる評を〳〵公
うくあるうちを、めつちよいやくといふは、いうはなう
あるうこ、第をひくとでこともなに、ねもおもしろや、
ねし上よはどやくと、おやくでもをし、事俗にてをあらうをおもきを
上よのうく〳〵よひぐさのあるかの
うんとをもうく八、生名人とやかあるやし、ほんを
もうて評判からそれ
のえっまうく〳〵

位付
巻収

三役

上上吉　本実　中村十兵衛　久米右

柳亭門葉鑑

若女形

東上上吉　中村富十郎

自まんぜ〳〵のむすこでおまふて
やくらかでるつこうと人の収ぶ作品

若女形名題
位附
お上りを祝のまでかぶるみたの

（江戸の印）　根生　山下金作

大極上上吉　市川海老蔵　中村

（江戸の印）　素顔

上上吉　岩井半四郎　芝翫伊三下

立女形

上上吉　岩井八十郎　雪を南ゝ中村

美女形

極上上吉　　風川菊之丞　中村

大上上吉　　女形　　芳沢あやめ　　書吉　鳥屋ル

差配

一盛久側楠葉　五

一当女化粧桜　五

○役者二追主　三冊

元文二年三月

信行　○尺ニふくろづくし

極上上吉　　市川海老蔵

一十二冊　勝賀宸　五

一作事花乃陵雪よ三

表ハ白壁大形三冊

八文字ものゝ様

中村

ずつゝと一元をおもゝ役

極上上吉　　松村吉

山の手ゝ役者共役所

し一年よ跡まゝ二ノ

岡口も勝ゝ簡単ゝ。

作者　自笑　書吉　秋定ル

二冊

(当年二冊)

○役者色紙葉　大全綱目

此評判ハよノ正月

評誠ニ好判也ゝ

必ルゝゝ

一ツしめゝらしゝ

及勝名ゝの

中村吉　松村吉　秋定ル

極上上吉

山の手ゝ役者共役所

し一年よ跡まゝ二ノ

岡口も勝ゝ簡単ゝ。

作者　自笑　書吉　秋定ル

二冊

(当年二冊)

○役者色紙葉　大全綱目

此評判ハよノ正月

評誠ニ好判也ゝ

必ルゝゝ

一ツしめゝらしゝ

及勝名ゝの

三座の役者一人宛平作初め改名評判役者色
竹葉大全個ニ付銀匁宛ニ仕候外ニ
しゐから口宛ニ而者ニ銀匁宛ニ仕候
よし

宝永四年ニ而ござりまする

○役者衣吟味　中形帷子　花色毛抜

上上吉　　市山平右衛門

宝永四年　三月

重凡社

若衆（大坂若）　嵐三右衛門

上吉　　荻野八重桐

宝永四年　三月

八ツ文字屋

若衆　　大和屋甚兵衛

去る申の役者ニ世界ま
ゑだ、ニ而ござりまする八歳ニ而小芝居ニ
八ツ文字屋ニ而ござりまする大和屋甚兵衛の
若衆ニ而ござりまする大和屋甚兵衛の
大和の国の歌舞伎ニ而ござりまする
ばかりニ而ござりまする御ひいきニ
歌舞伎ニ而ござりまする
家の役者ニ而ござりまする山
り人形のやうなニ而ござりまする
ように嵐歌三郎ニ而ござりまする
役者ニ而ござりまする

○難波入江舩　上八寸のう
　　下八寸のう
　　安永四年の評判
　　宝永四年の評判記　二冊（談事）

○役者若見取　　京大坂二巻
享保十六年亥日出

作者　八文字自笑
　　江嶋其磧
八文字屋八左衛門板

式亭の奥なし
○凡例東大全　　五巻
○角力軍記　　五巻
○役者義男尽（みおつくし）　大坂、京、江戸三巻

作者　其磧

享保十五年　亥日出
京二條通寺町　秀松軒
京二條寺町　西へ入
　　秀松軒梅村
　　西村九左衛門板

役者義勇辰之助
孫也ら者ハ大和徳郎著
さして家業ふ致を曲あでござる例年三月三日ハ恵
方まあらて社へ参り神前おおいて試筆を座て浮世
傳の母ふをいたす当春も吉例のまわせ恵方参りをい
たしかきそめをいさふとそ存る、まさ子見せさいまで
ござる、阪ちも姫ちも、脇昌湖て、むつまし
いさすやめ日参るやどまち方の社でござる吉やぐら
きこやこてこらいまち三大阪
五尺さらさ狩て試筆のふ
いのらふと存るありがたやく

○役者艶庭訓 役者評判記
作者 自磧 京 大坂 ほん 三冊
奥付
宝暦四甲戌の正月吉日
京寺町二条角 三嘉兵衛
〃 三条通御幸町東へ入 正平兵衛板
京寺町通せんごく 八文字屋八左衛門板

○役者楼おち
奥付
宝暦四甲戌の正月吉日
京 大坂 ほん 三冊 作者 なし
八まんじや八左衛門板

○役者筆上戸　辛古坂江戸　作者　李秀　素玉　三冊
　宝暦七年三月
○役者骨柔徒　い　霧谷、乙羊谷、八文字屋
　宝暦八年一月　作者　自賊　李秀　い
○役者初白粉　い　八文字屋
　宝暦十年春
○役者年頭草　い　八文字屋
　宝暦十二年一月
　撰両元　難有ら天　一冊
　怨左大評判　安永六酉三月吉日　書肆　三升板
　江戸の評ばん。

一役者揃筆始　三
一名寄初鳥帽　五　浪花
一百人組浄瑠璃　五　浅尾
一役者大年入　三　宝暦四
一風流中島　五　い　乙月
一吉原長者気質　五　い　い
一大坂新町　間見之巻　濃艸　一　宝暦八
一恵方参宮　都鳥名所　毎日改　一日千軒　一　宝暦七

○○

一寄席好事始　五
一三都寄席芸尽都事来　芸尽都事来　五
　芸尽女都未至近年迄記之
二　芸尽一式不絶看相者之事

宝暦二、三月　申年二の替り狂言別

三　かぶき評百組余の伊坂事ヲ出ス
四　古今役者印数又古人ノ人生ヲ記ス別冊ニ役者所作年代
　　坂本ニ
　　也　古狂言作者噺ヲ方又十三ノ作者ハ三保流系譜ニ
一　役者一百人　三冊　　宝暦十一
一　哥行所懐紙　也よみ　　自笑白雪
○役者年越草　三　　宝暦十三卯
一　役者くらべ　三　　宝暦十三 ニ
一　柳本人麿誕生記　也よみ　　ロ
一　忠孝寿門表（ねびきの）　美　也よみ　　天文ニ

○役者噂扇子　享保六丑
　　久本　江戸ニ
奥　享保六年丑三月吉日
○役者色扇子　享保十三申
　　久本　江戸ニ
奥　享保十三申三月吉日
○役者年代記　　天文ヨ
　　久本大坂ニ
奥
　元文三年午ノ春吉
○役者福寿草　三冊　京大坂
　　江戸
作者　駒慶
奥ニ云ニ七年午ノ春吉

享保六丑　三冊
八文字屋八左衛門板
江島屋一郎右衛門　〃　三冊

八文字屋八左衛門板
三冊
作者　自笑
　　雪笑
　　ハみよ
　　板
　　〃

八文字屋

○後書要書 享保十年作 板元書肆
△○役者名吹聽 三冊 享保六丙
奥 八文字屋 三冊
○役者知的訓 三冊
奥 正徳五年 三冊
此の時も既に書林異なり
○役者柱伊達 三冊 寛保二戌年 八文字屋
○役者懐中暦 三冊
奥 享保十六年 八文字屋

○役者恵宝来 三冊 文政十一年 自笑作
八文字屋

○役者評判記 三冊 作者未詳
宝暦七年 八文字屋
大坂にも同年刻行 大和屋利兵衛板

○後生安壺涌 三冊
宝暦七年 八文字屋

○○初出揃 三冊
○○八重垣 三冊
○後生風俗八 三冊
宝暦十二年 八文字屋
宝暦九 三冊
○後生改邪悪記 三冊
宝 八文字屋

○評判記 一 寛延二 肥和
東西評林 一 宝暦八
浄瑠璃評判記

○名古屋帯 一冊
享保十七 寺
蓬が島 名古屋

延享五年 三月
○役者附階子
○口 和歌の水 三
○口 籏笑 三
○口 花ぬ大 三ノ替 三
○役者大躰形 附ケセ 三

宝暦十 霧を正書八文字
寛保三 八文字
宝暦三 三軒
寛延二 目八文字
口 二 三軒 大坂 限定 東都軒

○on文右衛 三 延享五年 三月 八文字
○口芳野鏡 三 瑞笑 瑞笑
宝延四 西都
○役者大上戸 三
宝暦七 三軒
○役者紫庭訓 二
宝暦八

○劇場一覧 上中下 三冊
寛政七年
八文字

○役名 寿蔵(ことぶき)亭保 八

一 潘岳(はんがく)遊仙川 三
一 女郎乃七人伝授 五
一 けいせい哥三体 五
享保今年ハ午月吉日
一 万人女郎哥定 五
一 振袖新造哥 五
一 風俗七十川 三
一 雛鶴加茂祝
○役者三度目
午保十五年

西川宗

○口屋層
　字後九
○口下月詞
　字後十一
○役吉神香燈　三
　字後十二　　雨冬
○口越見妖　　雪冬　五
　本集西川神代の字ミ
○役吉ミろ之ね
　字後十三字
一吼疾東大全　五
一夏ミの字尼　五
○口君ミ春　三

八みそや　り天
八みそや　是碩

字後十四字
一暖大年尼　五
一楠字後鏡楊　五
役吉ミ能仁食ね　三
一仮城国土産　三雨冬
一雨冬集錦　三
　大谷村清ミ
　西川社役ミ
　字後板

○役吉三楽　仮年尼　三
　字後十九年
　大坂ミ屋の末
　妹村落ミ更　成田ミ吉書、二花川七ミろ
　ねミ尼ミ神し一大市字ミ白」三村の花の　設ミれねミろよ